山口県文書館蔵「朝鮮国之図」の内容とその系統本

河村克典

一　はじめに

対馬を巨大に描いた朝鮮図「朝鮮国之図」が、山口県文書館毛利家文庫に所蔵されている。[1] また、これと同系統の朝鮮図が東北大学附属図書館、岡山大学附属図書館、松浦史料博物館にも所蔵されている。

李氏朝鮮時代の朝鮮図について、李燦氏は前期朝鮮図と後期朝鮮図に区分した。[2] 本図はこの分類に従うと、半島の歪みがみられるので前期朝鮮図に含まれる。

これまでの前期朝鮮図についての系統的な研究例は、林子平著『三国通覧図説』付図「朝鮮国全図」、[3]「朝鮮国図」（国立公文書館内閣文庫、請求番号一七八―四四九）、[4]「朝鮮国図」（同文庫、請求番号一七八―四四六）、[5]「木版朝鮮総図」（韓国研究院蔵）[6] などがある。本図はこれらの朝鮮図と比較すると、記載内容が基本的に異なり、別系統の図であることが分かる。

本研究では、前記の四系統のものとは異なり、前期朝鮮図における一つの系統性をもった朝鮮図として、山口県文書館所蔵「朝鮮国之図」とその系統本を紹介してみたい。

二　本図の内容

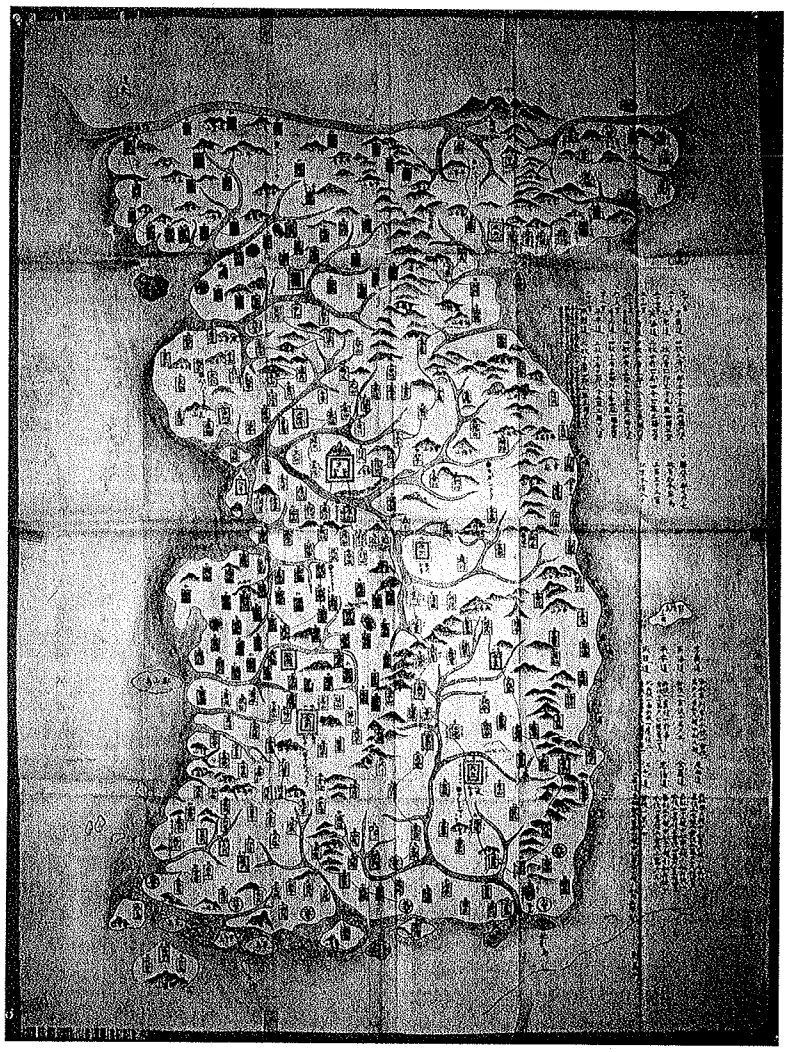
（1）半島部の描写

本図は手書手彩で、図面を展開した大きさは縦一一五、横八四センチメートルである（第1図）。本図の図示範囲は北は豆満江、鴨緑江から南は済州島、対馬までで、半島の東側には鬱陵島の記載がみられる。図中には地図の基本的な要素である山地、河川、島などが描かれている。河川は青、山は緑色で着色され、山については名称が記されている。李氏朝鮮時代に作成された朝鮮図は、川幅を大きく描き、山を連続して山脈のように描く方法が一般的であるが[7]、本図の場合、川幅は広く取ってあり、山は「へ」の字で孤立させて描いている。この山の描写は日本的な方法であり、本図は日本で写されたことをうかがうことができる。

李氏朝鮮時代は八道制（京畿・忠清・慶尚・全羅・黄海・江原・咸鏡・平安の各道）がとられ、地方の邑（州・府・郡・県）には地方官が派遣されていた[8]。本図は邑（州・府・郡・県）名に短冊型の枠が施され、この枠に地方官の位、さらに一部の邑（州・府・郡・県）については京都（漢城）までの日数が記されている。また、八道が区別できるように、短冊を道ごとに色分けしている。京畿道―赤、忠清道―青、慶尚道―灰、全羅道―黄、江原道―赤、黄海道―緑、平安道―青、咸鏡道―緑である。

図中に朱筋によるルートが示されている。これは、京都と朝鮮の各地域を結んで、次のAからFの6つのルートからなっている（第2図）。

A：京都―忠州―慶州―梁山―東萊



第1図　山口県文書館所蔵「朝鮮国之図」（請求番号、毛利家文庫、58絵図23）

B：京都－忠州－善山－大丘－梁山－東萊

C：京都－忠州－善山－統営

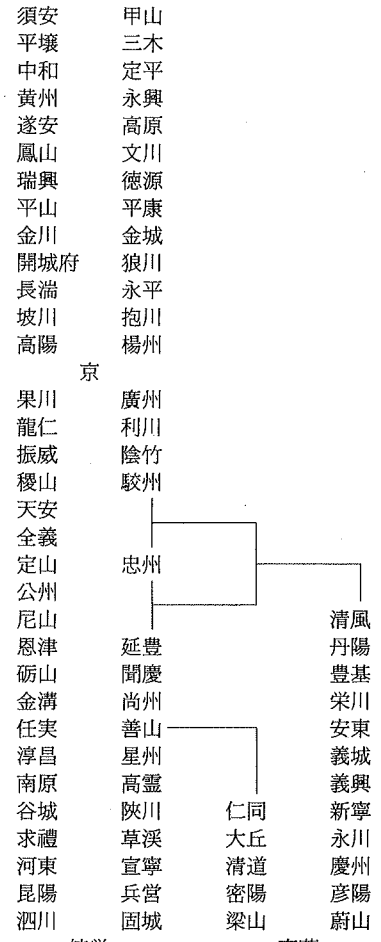
D：京都－公州－統営

E：京都－開城府－平壌－義州

F：京都－揚州－甲山

哲宗一二（一八六一）年に金正浩によって作成された「大東輿地図」には、李氏朝鮮時代の主要道が示されている。[9]

本図中のAからFのルートは、この図の主要道とほぼ一致することから、これは李氏朝鮮時代の主要道を示したものと考えられる。



第2図　図に記載された朱筋の模式図

（2）余白の記事

本図の余白には、李氏朝鮮時代の八道に関する記事がみられる。

［図面右上の余白］

京畿道　三十八官　四牧九府八郡五令十二監六驛六堡

江原道　二十六官　一牧六府七郡三令九監四驛五堡

黄海道　二十四官　二牧四府七郡四令七監三驛七堡

忠清道　五十四官　四牧一府十一郡一令三十七監六驛六堡

全羅道　五十七官　四牧四府十二郡六令三十一監六驛十八堡

慶尚道　六十九官　四牧十一府十四郡六令三十四監一驛二十四堡

平安道　四十二官　二牧十府十七郡八令五監二驛十八堡

咸鏡道　二十二官　二牧十五府四郡二監三驛三堡

凡三百三十三郡東西一千七十三里南北二千三百七十三里

周尺法指三三二指二為一尺六尺ヲ為一歩三百歩ヲ一里ト云口傳

朝鮮国義州ヨリ北京至二千二百六十里也遼東至五百六十里

驛堡ハ郡之外也

牧府郡令監為三百三十三官但京本府入テ

［図面右下の余白］

京畿道　海水軍判官二水使一僉使一萬戸三番船九艘中船九艘
黄海道　兵使一僉使二萬戸五
平安道　兵使一虞侯一許事僉使十一萬戸七権管二十九
咸鏡道　北兵使一南兵使一虞侯二僉使十二萬戸十八権管二十一
慶尚道　戦船五十六艘中船五十六艘小船兵使二虞侯二水使二僉使五萬戸十九権管六
全羅道　番船四十二艘中船四十二艘小船兵使一水使二虞侯三僉使四萬戸十三権管一
忠清道　番船二十艘中船二十艘小船兵使一水使一虞侯二僉使二番戸三
江原道　僉使一萬戸四
五箇道番船都合百二十七艘中船百二十七艘小船内無軍船有

図面右上の記事は各道ごとの地方官の数、朝鮮における東西、南北の距離、義州から北京、遼東までのそれぞれ距離などが示されている。また、図面右下の記事は各道の番船、兵使、水使、虞侯、僉使、萬戸の数が示されており、軍事に関する内容である。李氏朝鮮時代は中央と地方に軍隊が組織され、このうち、地方には兵使、水使、虞候、萬戸、僉使が派遣されていた。これらの記事から、本図の作成者は朝鮮の地方組織や軍政に関心があったことがうかがえる。

（3）原拠図の作成年代

本図の作成経緯を示す内容としては、題簽に「朝鮮国之図　長井半左衛門九郎右衛門より差出候写也」がみられる。木部氏はこの記事について、長井半左衛門は鉄砲組であること、また、本図が差し出されたのは安永三（一七七四）年から同六（一七七七）年頃と推測した。[10] しかし、本図は写しの図であり、本図の内容が李氏朝鮮時代の何年の様子を示しているかについては、検討していない。李氏朝鮮時代は行政区画である邑（州・府・県・郡）の廃止、統合、新設が行われているので、本図に書き込まれたそれらを検討して、本図の原拠となった図の作成年代を推定してみたい。[11]

まず、作成年の上限であるが、仁祖一五（一六三七）年、仁祖一八（一六四〇）年に慶尚道の慈仁県、漆谷府がそれぞれ新設され、また、孝宗三（一六五一）年には黄海道の江陰県と牛峰県が統合されて金川郡が新設された。本図には、慈仁県、漆谷府、金川郡の地名がみられることから、一六五一年よりも後に作成されたものと考えられる。次に下限であるが、肅宗一〇（一六八三）年に咸鏡道の茂山府、肅宗二（一六七五）年に慶尚道の英陽県が新設された。本図にはこの地名は記されていないことから、一六七五年を下らないものと考えられる。以上のことから、本図の内容は、一六五一年から一六七五年の間の朝鮮の状況が描写されていることが分かる。

第１表　山口県文書館蔵「朝鮮国之図」とその系統本

	名称	所蔵先	請求番号	形態など		
①	朝鮮国之図	山口県文書館 毛利家文庫	58絵図23	115×84 (cm)	手書手彩	１枚図
②	朝鮮国絵図	松浦史料博物館	乙26,956	108×77	手書手彩	１枚図 宝暦９年
③	朝鮮地図 写(1-16)	松浦史料博物館	乙26,954	128×80	手書手彩	切図(16枚) 寛政３年
④	朝鮮地図	松浦史料博物館	乙26,955	134×75	手書手彩	１枚図
⑤	朝鮮国全図	東北大学附属図書館 狩野家文庫	3-9313-1	109×80	手書手彩	１枚図
⑥	朝鮮地図	岡山大学附属図書館 池田家文庫	T-10、33	106×76.5	手書手彩	１枚図
⑦	朝鮮地図	岡山大学附属図書館 池田家文庫	T-10、34	106×76.5	手書手彩	１枚図

三　系統本の概要

前述のように、山口県文書館蔵「朝鮮国之図」と記載内容が近似している朝鮮図は、管見では東北大学附属図書館、岡山大学附属図書館、松浦史料博物館に所蔵されている（第1表。以下、本文では表の七点のそれぞれの図を略して、①から⑦の番号でよぶことにする。）。これら①から⑦の地図の大きさは、縦一二〇、横八〇センチメートル前後で、ほぼ同じ大きさである。これらはすべて手書彩色である。

松浦史料博物館には、②③④の三点の同系統の図がみられる。このうち、②は題簽に「朝鮮国絵図」と書かれた図で、図中に「宝暦九卯巳年　八月吉日　図師　亮円堂　常□」とあり、宝暦九年（一七五九年）の作成であることが分かる。③は一六枚の長方形に切断された切図で、一六枚の図が納められた箱の表には、題簽に「朝鮮地図　楽歳堂校本　拾陸枚」と書かれている。この中の「拾陸枚」は一六枚の意味で、切り図一六枚を指している。この図には、作成経緯を示す記事[12]がみられ、もともと二枚の地図があって、両者はいろんな面で違いがあったので、「徴秘録」でこれを正して作成したと記されている。また、この記事には作成年代が寛政三年（一七九一）と示されいる。本稿で取り上げた地図のうち、作成年代が記されているのは前述のように②と③である。④は題簽に「朝鮮地図」と書かれた図で、②に比べ③に近い内容となっている。

東北大学附属図書館狩野家文庫には、山口県文書館蔵「朝鮮国之図」と同系統の図が一点みられる。この図⑤は対馬が巨大に描かれ、余白には記事がみられる。岡山大学附属図書館池田家文庫にも、山口県文書館蔵「朝鮮国之図」と同系統の図が二点みられる。この池田家文庫の図⑥⑦には対馬の描写はなく、また、余白にも記事はみられない。

四　本図と内閣文庫「朝鮮国図」

本研究で取り上げている山口県文書館蔵「朝鮮国之図」（以下、「山口本」と略す）と内閣文庫「朝鮮国図」[13]（以下、「内閣本」と略す）を比較してみたい。内閣文庫には題名の同じ図があり、注意したい。ここで取り上げる朝鮮国図は、請求番号（一七八－四四六）であり、請求番号（一七八－四四九）の図ではない。

これら山口本と内閣本は、半島の輪郭は近似しているものの、地名の記載量、記載方法、対馬の描写、島の記載、朱筋、地方官、地方軍政に関する記事、行政地名（金川郡、江陰県、牛峰県）などに差違がみられる。地名については、内閣本は山口本に比べて記載量が多く、たとえば、全羅道の南海岸の南海から済州までの間に、山口本は鹿島、古今山、牛馬などが記載されているのに対し、内閣本には弥助浦、尚州浦、典浦、平安浦、順天、防路、呂島、鉢島、蛇渡、興陽、鹿島、馬島、古今山などの多くの地名が読み取れる。一般に朝鮮図に記されている邑（州・府・県・郡）は、朝鮮半島を南から北に向かって眺められるように北向きに統一されているが、内閣本の場合、国の中心である京都（王城）へ向けて傘状に記載されている。対馬に注目すると、山口本はこの島が大きく描かれているのに対し、内閣本はこの描写がみられない。また、山口本は朱筋一種類に限られ、内閣本には墨と朱の二種類の筋がみられる。

記事においては、山口本は前述のように地方官、地方の軍事力、番船、石高が記載されているのに対し、内閣本には次のような記事がみられる。

凡東西一千七十三里南北二千三百七十三里周　　尺六尺為一歩為一里息ハ三十里也

京畿道　番船九艘中船九艘

忠清道　同廿艘　同廿艘
全羅道　同四十二艘　同四十二艘
慶尚道　同五十六艘同五十六艘
四箇道番船都合百二拾七艘中船百二十七艘小船ハ不記右ハ古今不易ノ備之近年ハ加増スルト云
朝鮮ノ山ヲ各々画ドルハ春夏ノ姿之如何ナレハ朝鮮不義ニシテ日本ノ如クノ法ノ厳重ナルコ□ナシ回テ松柏ノ仕立ルコトカナワス故ニ松柏森々タル山ハ微ニシテ芽萱ノミ生シタル山多シ然レハ冬ハヲ々カタ黄シコトニ農作ニヨツテ山面折々カワルコトアリ

このように、朝鮮の広さを示す東西南北の距離、八道のうち京畿道、忠清道、全羅道、慶尚道に関する番船の数、さらに朝鮮の山野の風景について記載されている。これらのうち、東西南北の距離、番船の数については、山口本の内容と一致がみられる。

邑名では、孝宗三（一六五一）年に江陰県と牛峰県が合併して金川郡が新設されたが、山口本には金川郡に加えて江陰県、牛峰県の邑名が、内閣本には新設の金川郡が書かれている。山口本は合併前の地名である江陰県と牛峰県を削除せずに、そのまま記載している。

五　おわりに

本研究では、前期朝鮮図の一系統の朝鮮図として、山口県文書館毛利家文庫「朝鮮国之図」などが存在することを紹介した。この毛利家文庫「朝鮮国之図」は、これまでに木部氏によって安永三（一七七四）年から同六（一七七七）年頃に長井半左衛門組九郎右衛門より差し出された図であることが指摘されているが、本稿ではさらに本図は一六五一年から一六七五年に作成された図を原拠として写されていることを明らかにした。

本図と半島の輪郭が近似している朝鮮図としては、内閣文庫「朝鮮国図」（請求番号一七八－四四六）がみられるが、両図は地名の記載量、記載方法、対馬の描写、島の記載、朱筋、地方官、地方軍政に関する記事、邑名（金川郡、江陰県、牛峰県）などについては差違がみられる。この両図は元々は同じ図を原拠としており、何度か写して新たな図を作成いくうちに、このような二系統の図に分かれたものと考えられる。

［付記］
本研究を進めるに当たり、東亜大学教授川村博忠先生のご指導をいただいた。また、資料の閲覧では、東北大学附属図書館、国立公文書館、岡山大学附属図書館、松浦史料博物館の職員の方々にお世話になった。ここに記して感謝いたします。
なお、本稿は一九九五年度日本地理教育学会研究発表大会で発表した内容の一部を加筆、修正したものである。

［注］

（1）山口県文書館（一九七二）：山口県文書館史料目録三、毛利家文庫目録、第三分冊、六三頁。

（2）李燦（一九七七）：韓国古地図の発達（韓国語）、（『韓国古地図』韓国図書館学研究会）に収載。この李燦氏の研究によると、後期朝鮮図は鄭尚驥（一六七八―一七五二）作成の「東国地図」、金正浩が一八六一年に作成した「大東輿地図」をさしており、これらは、朝鮮半島の歪みを解消し、半島の輪郭が現代の地図に近い内容である。この地図の系統を持つ朝鮮図を後期朝鮮図、これより前の、朝鮮半島の歪みがみられる系統の朝鮮図を前期朝鮮図という。

（3）海野一隆（一九七五）：日本古地図大成世界図編、解説、織田武雄・室賀信夫・海野一隆編集、講談社、二一頁。河村克典（一九九〇）：山口県文書館蔵「朝鮮八道図」について、エリア山口、一九、山口地理学会。河村克典（一九九七）：林子平「朝鮮国全図」の内容とその系統本、エリア山口、二六、山口地理学会。

（4）青山定雄（一九三九）：李朝に於ける二三の朝鮮地図について、東方学報、九。長正統（一九八二）：内閣文庫所蔵『朝鮮国図』およびその諸本についての研究、史淵、二〇―二。河村克典（一九九二）：岩国徴古館所蔵「朝鮮國惣圖」について、山口県地方史研究、六七。

（5）河村克典（一九九八）：内閣文庫所蔵「朝鮮国図」の記載内容について、地図、三六―一。

（6）西川孝雄（一九八二）：李朝時代の『木版八道総図』韓、一〇一、韓国研究院。韓国研究院は現在、閉鎖されており、西川孝雄氏が調査した朝鮮図の所在は不明である。

（7）海野一隆（一九八三）：韓国地図学の特色（韓国語）、韓国科学史学会誌、五―一。

（8）旗田巍編（一九八八）：『朝鮮の歴史』三省堂、一五一頁。

（9）洪慶姫・朴泰和（一九八一）：大東輿地図に現れた駅站の分布と立地（韓国語）、教育研究誌、二三、慶北大学校師範大学。

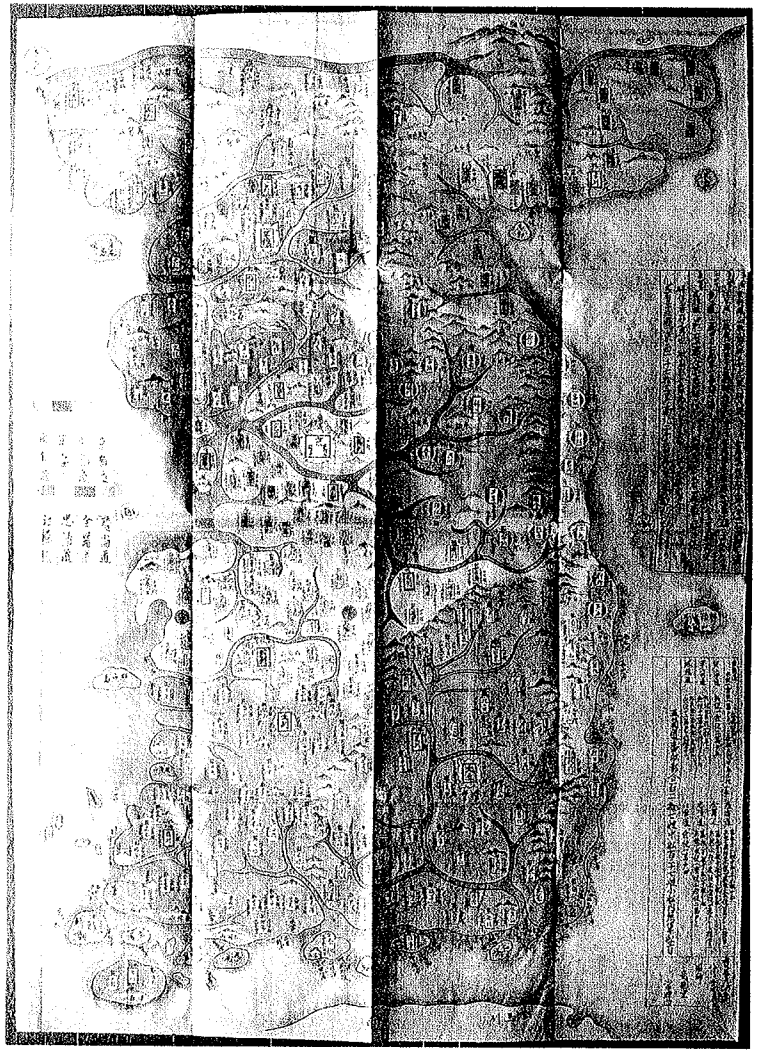
（10）講演配布資料、「近世長門における朝鮮語通詞と朝鮮情報」一九九七・九・一七。

（11）李泳澤（一九八六）：『韓国の地名』（韓国語）、太平社、四八一―四八三頁。金雲泰（一九八七）：『朝鮮王朝行政史』（韓国語）、博英社、一六六―一一八頁。

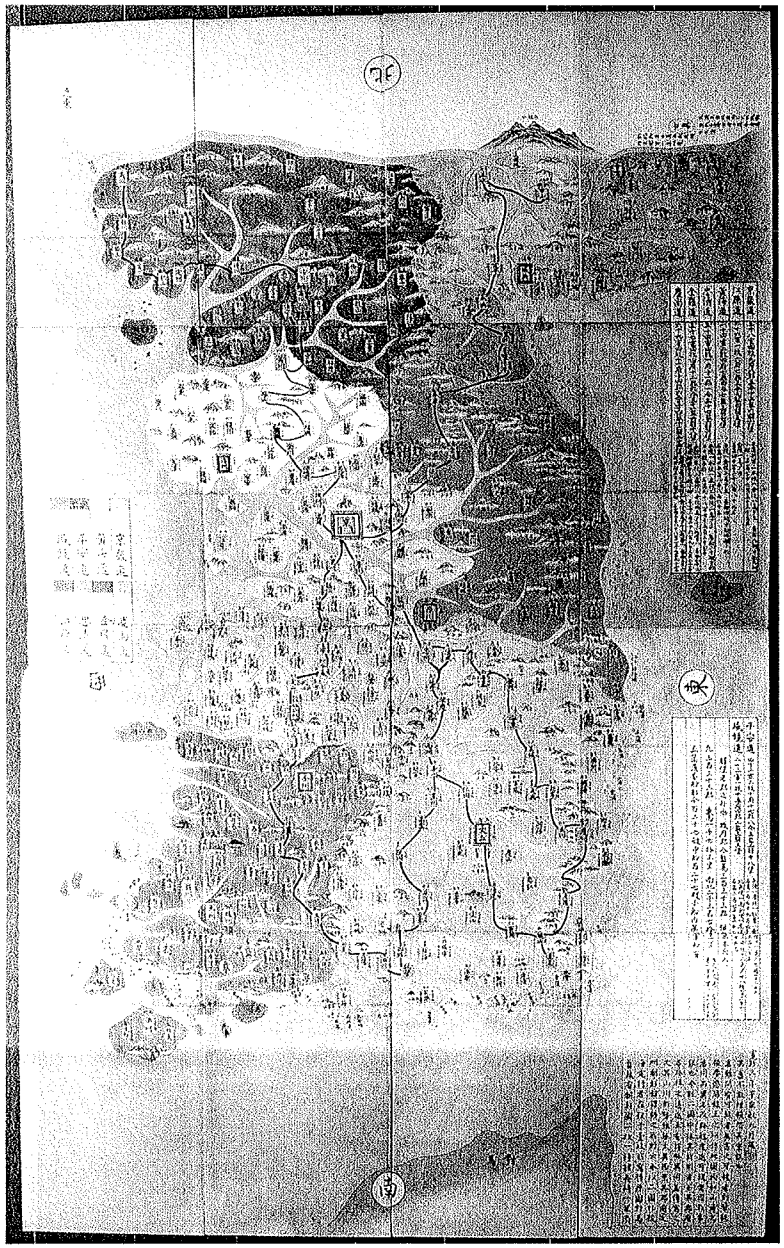
（12）旧蔵有朝鮮図二枚得諸長崎一臣南海定行者在役于壱岐所写得原図対馬州朝鮮館訳師之所貯伝今以二図比校之之其山川形勢難無大異而至其郡府之名路程之遠近互有詳略異同蓋伝写誤也今就二図中採其鮮明者若其郡府名同出異名及路程遠近可疑者因致事撮要徴秘録正之以作此図而如山浦之名難間有可疑者無書之可拠者則皆従其旧不敢増損恐其重誤也　　寛政三年辛亥秋九月識

（13）前掲（5）。

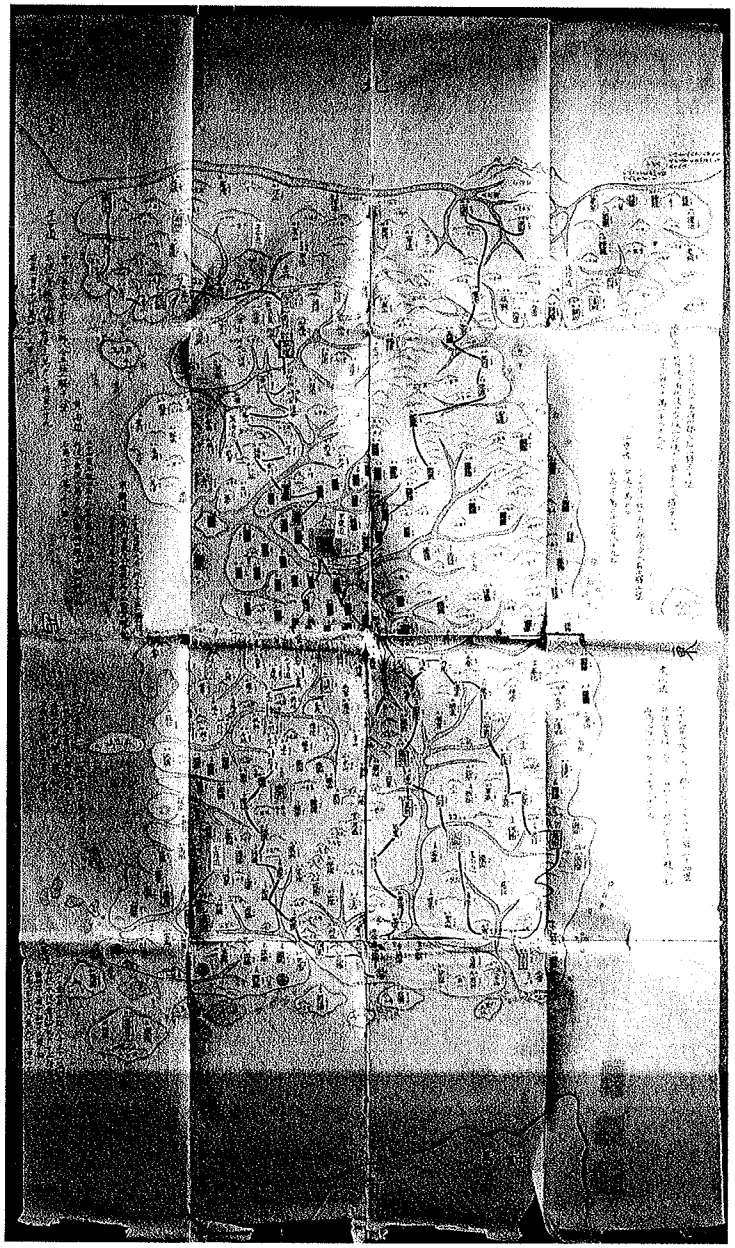
［資料］



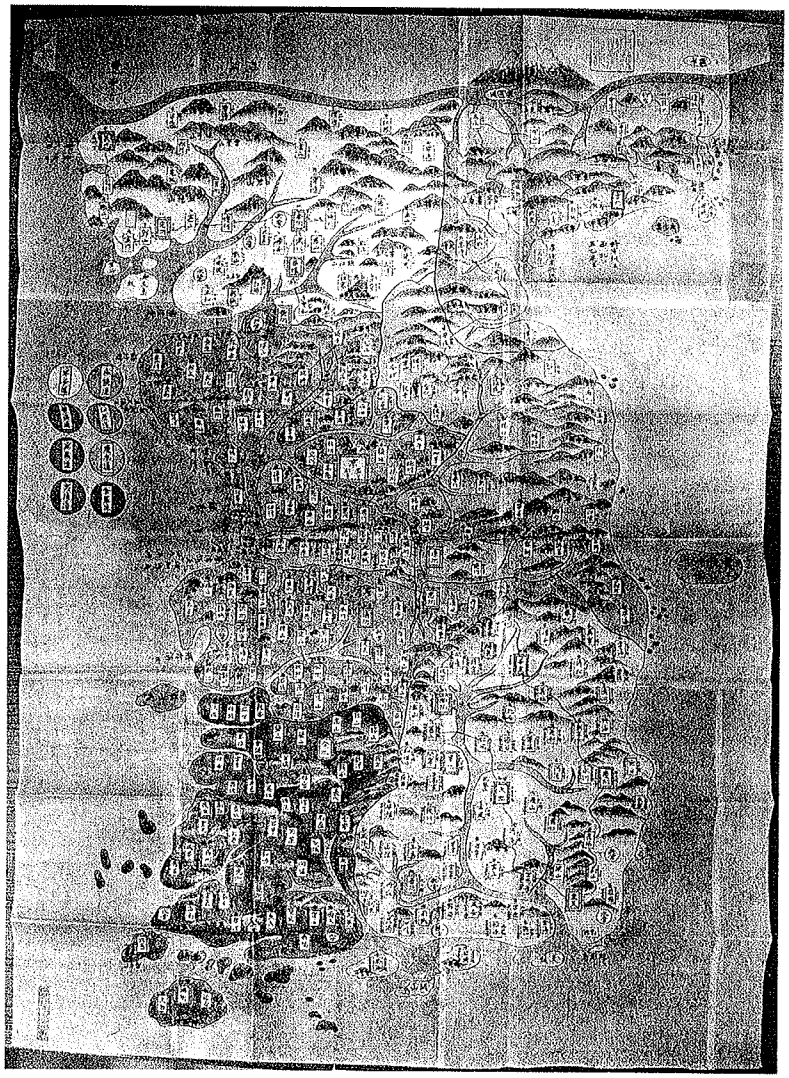
松浦史料博物館所蔵「朝鮮国絵図」（請求番号、乙26,956）
（２分割で撮影したものを合成した）



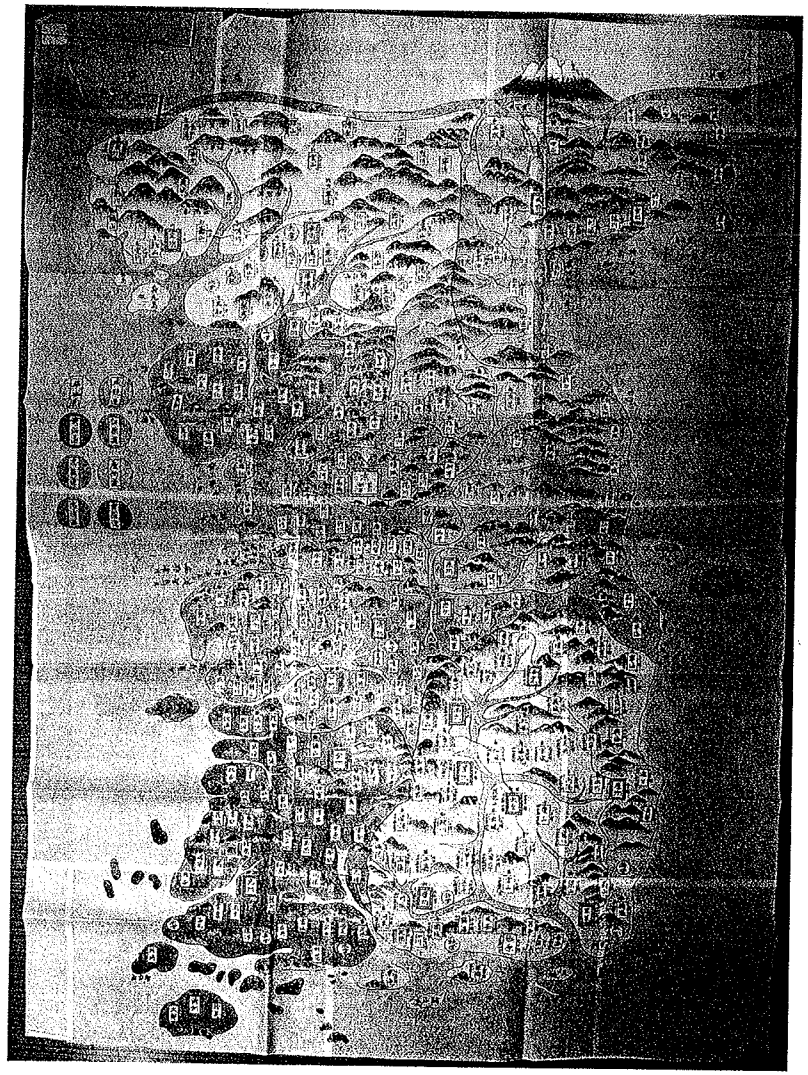
松浦史料博物館所蔵「朝鮮地図写（１－16）」（請求番号、乙26,954）
（２分割で撮影したものを合成した）



松浦史料博物館所蔵「朝鮮地図」（請求番号、乙26,955）
（２分割で撮影したものを合成した）



岡山大学附属図書館所蔵「朝鮮地図」（請求番号、池田家文庫、Ｔ－10,33）
（２分割で撮影したものを合成した）



岡山大学附属図書館所蔵「朝鮮地図」（請求番号、池田家文庫、T－10,34）
（２分割で撮影したものを合成した）